

【字解】(一)相依 住居せしこと。(二)熱人 見知りの人。(三)遺燕 昔燕樹 北魏が大舉して南侵せしとき、到る處、ひとく宛らされて、家も無いやうに成つたから、春の燕が林木に集つたといふこと、南史に見え、前に卷十、次三韻揚孟載の詩中に引いて置いた。

【題義】この詩は、兵亂の後、婁江の舊寓を過ぎ、四邊の荒廢した實況を見て作つたのである。

【詩意】ここ婁江の地は、曩に寄寓して居た處であるが、再び來て見ると、有りし昔に似もやらず、事事皆非である。年改まつて、春の若草は、遍なく生ひ茂つて居るが、もとの村里には、見知りの者も稀である。村民の家など、皆壊れたものだから、遠くから來た燕は、止むなく林樹に巢ひ、花は、しづ心なく江邊の斷磯に散りかかつて居る。遺蹟など、今、求むるに由なく、止むを得ず、愁を含みながら、夕日の中を歩いて歸る外はない。

悼故顧宜人

故顧宜人を悼む

避亂應千里。悲離復幾年。亂を避くる、應に千里なるべし、離を悲む、復た幾年。

塵埃初嫁鏡。雨雪未歸船。塵埃、初嫁の鏡、雨雪、未歸の船。

有子隨行旆。無人與葬錢。子あり、行旆に隨ひ、人の葬錢を與ふるなし。

東芻何處弔。衰草暮江邊。東芻、何處にか弔はむ、衰草暮江の邊。

【字解】(一)悲離 離別を悲む。(二)行旆 葬式の旗、潘岳の墓誌に「飛旆以啓路」とある。(三)東芻 唐書郭元振傳に「郭震、字は元振、魏州貴鄉の人、字を以て顯はる。少にして大志あり。十六、薛稷、趙彥昭と同じく太學生となる。家、かつて資錢四十萬を送る。會ま統服の者あり、門を叩いて自ら言ふ、五世、未だ葬らず、顯はくは、假りに以て喪を治めむ」と。元振、擧げて之を與へ、少しも吝むなく、一も名氏を費さず、稷等歎服す」とある。(四)東芻 詩經に生芻一束、其人如玉とあつて、芻は眞菴、それを束にして墓前に供へる。なほ後漢書徐穉傳に「郭林宗、母の憂あり、穉、往いて之を弔ひ、生芻一束を墓前に置いて去る。衆、怪んで知らず。林宗曰く、これ必ず南州の高士徐孺子ならむ」とある。

【題義】顧宜人は、どういふ人が分からぬが、詩で見ると、亂を避けて吳中に來り、隨分艱苦をした揚句に、病死したものと見える。宜人は人の妻君の尊稱。

【詩意】宜人は、亂を避けて、千里の遠きより來り、夫との離別を悲むこと、ここに幾年。嫁入の時に持参した鏡は、塵埃に塗みれ、雪ふる冬の日に、まだ歸舟を用意するに及ばず、遂に此處で亡くなつて仕舞つた。幸に錦旗に隨つて棺を送る俸はあるが、誰も葬費を與へる人もなく、形ばかりの葬式を出したのは、まことに、氣の毒の至である。さて生芻を用意して、これを弔はむとし、その墓は、何處かと問へば、枯れ草の残つて居る暮江の邊で、處から、すでに人の愁思を催さしめる。

過劉山人園

劉山人の園を過ぐ

欲問幽棲處。花蹊逐澗迴。幽棲の處を問はむと欲すれば、花蹊、澗を逐うて廻る。

夕煙羅幙卷、春雨藥房開。

夕煙、羅幙卷き、春雨、藥房開く。

野鶴知琴意、山蜂給酒材。

野鶴、琴意を知り、山蜂、酒材を給す。

城中少閑客、誰解引車來。

城中、閑客少く、誰か車を引いて來るを解せむ。

【字解】(一) 花談 史記李將軍傳の論贊に「桃李言はす、その下賤を成す」とあつて、誤は小徑。(二) 藥房 藥室、藥を調合する部屋。(三) 山蜂給酒材 蜂蜜が酒の着になること。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 山人の幽棲の處を尋ねむとすると、花下の細路は、澗水に随つて屈曲し、自然に林壑の間に分け入つた。その宅に往つて見ると、夕煙の棚引くあたりに羅幙を卷き上げ、春雨のしとしと降る中に、藥室は明け放しである。野鶴は、琴の意味を知るが如く、ここに聞きに來るし、山蜂は、蜜を供給して、酒材となさしめる。城中には清閑を樂む人が少いから、誰も此處に車を引いて來やうと思ふ人はない。

【餘論】 後聯は、聊か刻劃に過ぎて居るが、なほ名聯たるを失はぬものである。

次韻楊禮曹移疾之作

楊禮曹の疾を移すの作に次韻す

養疾深屏掩、還應謝俗交。

疾を養うて深屏を掩ふ、還た應に俗交を謝するべし。

鳥多風和語、葵晚雨緘苞。

鳥は多くして、風、語に和し、葵は晩にして、雨、苞を緘す。

印向閒廳鎖、鐘聞近寺敲。

印は閒廳に向つて鎖し、鐘は近寺に敲くを聞く。

相思愁暮靄、高樹古城坳。

相思、暮靄を愁ふ、高樹古城の坳。

【字解】(一) 風和語 風が鳥語に和する。(二) 葵晚 葵はあふひ、秋、花を開く。(三) 緘苞 舌を封する。(四) 古城坳 坳は凹、窪地。

【題義】 移疾とは轉地療養。この詩は、楊禮曹の轉地療養の作に和したので、禮曹は、即ち楊基であらう。

【詩意】 病氣保養の爲に、深屏を閉ぢ、世の俗交を謝絶して居るであらう。地僻なる爲に、鳥が多く集まり、そして風が鳥語に和し、葵は花開くこと遅く、動もすれば、雨天の寒氣の爲に再び苔が封せられる。腰下の印は、役所に置いた儘であるし、鐘は近處の寺で撞き出すのが聞こえる。君を思へども、暮靄の爲に、その居る處が、はつきりとは分からず、大方、古城の窪地に高樹が林をなして居る其邊であらうと思はれる。

【餘論】 大全集には、第七句を相思愁暮過に作つてあるが、第八句との關係から云ふと、矢張、ここ

送周履道入郭

周履道の郭に入るを送る

離羣方感愴、況復與君違。

離羣、方に感愴、況んや、復た君と違ふをや。

花隱歸城旆、風吹渡水衣。

花は隱す城に歸るの旆、風は吹く水を渡るの衣。

須知喧寂異、莫訝往來稀。

須らく知るべし、喧寂の異なるを、訝る莫れ、往來の稀なるを。

今夜空齋雨、誰憐獨掩扉。

今夜空齋の雨、誰か憐む獨り扉を掩ふを。

【字解】 (一) 離羣、多くの友人と離れる。(二) 感愴、感慨愴然たること。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 予は、多くの友人と離れ、さびしく獨り此に居るのに、まして、君と別れては、愈よ堪へられない。送りに來た人は、城に歸らむとし、その押し立てて來た旗は、花に隱れ、君は江水を渡らむとして、浦風さむく衣を吹く。ここに至りて、喧騒と静寂と、俄然相異なるを知るべく、今日亂後に當りて、旅客の來往少きは、當然の事である。これから、歸つて、今夜、空齋の雨に坐し、われ獨り戸を閉ちて幽臥するのを、誰も何とも思つて呉れぬ。

【餘論】 前に城西客舍送周著作砥一と題して、

客中寒食後。惆悵送君違。花隱歸城旆。風吹渡水衣。夜窓炊黍散。春苑鬪茶稀。誰念西齋雨。相思獨掩扉。

の一首があつて、第一句と後聯とが違ふだけで、あとは、大抵、ここに在るのと同じである。すると、いづれか改作に相違ないが、もとより格別の者でもなく、さばかり甲乙あるものとも思へぬ。これを兩つながら採録したのは、疑もなく、編輯者の粗漏である。それから、兩首の詩題に據つて、周著作、名は砥、字は履道といふことが推定される。

雨齋獨坐、寫寄友

雨齋獨坐、寫して友に寄す

動與世相妨、端居學坐忘。

動もすれば、世と相妨げられ、端居して坐忘を學ぶ。

雨來池上樹、煙起竹間房。

雨は來る池上の樹、煙は起る竹間の房。

屋鳥非晴弄、闌花是晚芳。

屋鳥は晴弄に非ず、闌花は是れ晚芳。

尋山期已阻、遙望奈蒼蒼。

山を尋ねて、期、すでに阻つ、遙望、蒼蒼を奈かむ。

【字解】 (一) 端居、謹慎して家居する。(二) 晴弄、晴天に鳴く。(三) 闌花、闌は眞盛りを稍や過ごしたること。(四) 晚芳、

曉花に同じ。【五】朝已阻、約束して期日が妨害された。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】予は、動もすれば、この世と相妨げられ、止むを得ず、謹慎して蟄居し、専り坐忘といふことを工夫して居る。折から、雨は池上の樹に注ぎ來り、煙は竹の間なる僧房から緩く立ち上つて居る。屋根の上で鳥が鳴いて居るが、晴天に歌ふのとは、聊か異なつて居る様であるし、春の名残の花は、今が真盛りである。ただ一處に山に遊ぶうと約束した期日が妨害せられたので、遙に山色の蒼蒼たるを眺めて居るばかりである。

次韻酬西園公

次韻して西園公に酬ゆ

林驚緣樹鼠、池響食萍魚。

林には驚く樹に緣るの鼠、池には響く萍を食ふの魚。

月戸雙砧落、風亭一簾舒。

月戸、雙砧落ち、風亭、一簾舒ぶ。

體便清夏健、髮映早秋疏。

體は便にして清夏に健、髮は早秋に映じて疏なり。

本自無愁事、何煩酒破除。

本と自から愁事なし、何ぞ酒の破除するを煩はさむ。

【字解】

【一】緣樹鼠、木を這つて居る栗鼠。【二】雙砧落、二つの砧杵が交互に鳴り響く。【三】體便、からだか自由動く。

【四】酒破除、餘意の時に、破三餘萬事、無酒酒とある。

【題義】

説明に及ばぬ。西園公は張士誠幕下の大官であらうが、名字不詳。

【詩意】林中では、木を這ひ上る栗鼠が驚いて啼いて居るし、池中には、浮草をつついて居る魚が響を爲して居る。月下の人家には、二つの砧が懸け合ひ鳴り出し、風の吹き入る亭子には、一枚の竹むしろを鋪いてある。體の働きは自由で、清清しき夏、殊に健康であつたが、秋に成ると、髮が抜け、稍や薄くなつた様な氣がする。しかし、格別心配すべき事もないから、酒を以て破除するにも及ばない。

【餘論】起首二句は、對偶をなし、そして、前に見える晚步園池の後聯、林爭移樹鳥、池響食萍魚と極めて類似して居ることを、ここに斷つて置く。

聞鄰家琵琶有感

鄰家の琵琶を聞いて感あり

清唱合琵琶、當年碧玉家。

清唱、琵琶に合す、當年碧玉の家。

弄殘催酒急、抱重向燈斜。

弄は殘して酒を催すこと急、抱くこと重く、燈に向つて、斜なり。

久別愁江樹、重聽隔院花。

久別、江樹を愁へしめ、重聽、院花を隔つ。

淚多思舊事、不是客天涯。

淚多くして舊事を思ふ、これ天涯に客たるならず。

【字解】【一】清唱。清き聲の歌。【二】碧玉。古樂府に碧玉小家女とあつて、美人の名。【三】弄殘。彈奏が將に終らむとする。【四】抱重。琵琶を抱いて重たげに見える、白居易の詩に、千呼萬喚初出來、猶抱琵琶半遮面となる。【五】院花。庭院を飾る花。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】清き聲の歌に合はせて、琵琶を掻き鳴らすのは、その昔、世に知られた美人の家である。彈奏、將に畢らむとして、酒を催すこと急に、重げに抱へて居る影は、燈前に向つて斜なるが如く見える。予は、友と別れて、すでに久しく、愁は江上の樹に満ち、ここに重ねて四絃の音を聞くものの、庭花を隔てて、その席の様子などはよくは分からぬ。涙の多きは、舊事を思ひ出たからであつて、もとより、天涯の客ではない。

書王生扇

王生の扇に書す

素質粉藤光。蒲葵詎可方。

素質、粉藤の光、蒲葵、詎ぞ方ふべき。

當懷驚抱月。洒面怯沾霜。

懷に當つて月を抱くに驚き、面に洒いで霜を沾すを怯る。

宜助驅蠅用。羞隨走馬狂。

宜しく蠅を驅るの用を助くべく、走馬の狂に隨ふを羞づ。

過時甘自棄。不怨井梧黃。

時を過ぎ自ら棄てらるるに甘んず、井梧の黄なるを怨みず。

【字解】【一】素質。その純白なる本質。【二】粉藤。白粉の色なせる藤紙。【三】蒲葵。その葉の乾したのを編んで團扇とする。【四】走馬狂。漢書に「張敞、京兆たる時、朝を罷め、馬を章臺街に走らし、自ら便面を以て馬を拊つ」とあつて、その注に「便面は、面を障る所以、蓋し扇の類なり」とある。

【題義】この詩は、王某所有の團扇に題したので、詩で見ると、絹製ではなく、紙で造つたものらしい。

【詩意】王君の持つて居る扇は白地で、藤紙を張つて造つたから、光澤があつて、蒲葵扇などは、到底比較に成らない。これを懷に當てると、人が見て、月を抱いて居るかと思はばかり、顔に持つて行く時、霜がかかりはせぬかと恐れる位。これを以て蠅を驅除する用を助けることが出来るが、章臺に馬を走らした張敞の狂に隨ふことを羞づる。時節を過ぐれば、不用だといつて棄てられるが、固より之に甘んじて、井畔の桐の葉が黄ばみかかつて、秋の來たことを怨まない。

送胡鉉游會稽

胡鉉の會稽に遊ぶを送る

山水獨行徧。苕溪仍剡溪。

山水、獨行徧ねし、苕溪と剡溪と。

衣逢新火減。舟渡雜花迷。

衣は新火に逢うて減じ、舟は雜花を渡つて迷ふ。

黃絹尋碑讀紅裙賭墅攜。黃絹、碑を尋ねて讀み、紅裙、墅を賭して攜ふ。
清游不能共。腸斷聽猿啼。清游共にする能はず、腸断えて猿啼を聴く。

【字解】(一) 新火、東坡の詩に「三見清明改新火」とある。寒食の後、火を改めることを云ふ。(二) 黃絹、一統志に「曹娥碑は、紹興府城南の江上に在り」とある。その碑文は、郡郭淳の作で、後に蔡邕が之を贊して、黃絹幼婦外孫姪曰の八字を碑陰に鐫らしめた。それを楊修が見て、直に絶妙好辭の隱語たることを知つたので、その評は、前に卷二、主客行の小兒能讀曹娥碑の句下に述べて置いた。(三) 紅裙、晉書謝安傳に「會稽に寓居し、游賞する毎に、必ず妓女を以て従ふ」とある。(四) 賭墅、苻堅が大舉南侵せし時、謝安が其姪玄と墅を賭して茶を闘はしたことで、その評は、前に卷四、燕客の詩中に述べて置いた。

【題義】胡鉉は如何なる人か分からぬ、大全集には、銓に作つてあるが、それでは、宋の胡澹菴と全く同名で、どうも誤らしく思はれる。會稽は、紹興府に屬し、禹が諸侯を會したことを始めとし、むかしから、史實に富んだ地方である。

【詩意】君は、獨行して、遍なく山水の勝を尋ね、苕溪より剡溪に及び、少しも見残す處はない。今しも、春の半を過ぎて、新に火を換へた頃、暖氣日に増す爲に、衣を薄くし、到る處、花が咲き亂れ、舟は其間を渡つて、遠近に迷ふ位。黃絹幼婦と稱せらるる曹娥の碑を尋ねて讀み、又當年の謝安を學んで紅裙の妓を攜へ、別墅を賭して茶を闘はす様な風流もあらう。遺憾ながら、予は君と清游を共にすることが出来ないで、日暮、猿聲を聞くと、自然、斷腸するばかりである。

【餘論】大全集には、結二句を蘭亭舊基在、鴈詠付新題一に作つてあるが、新題は、前の新火と併せて、新の字が重複するから、後に改竄して、ここに掲げた通りにしたのであらう。なほ前聯は、濃春の煙景を巧に描き出した名聯である。

送陳少府赴嘉定

陳少府の嘉定に赴くを送る

雨歇桑陰路。爭迎紺轡車。雨は歇む桑陰の路、争うて迎ふ紺轡車。
湖多田水滿。城小井煙疏。湖多くして田水滿ち、城小にして井煙疏なり。
夜戶猶聞犬。春濤欲上魚。夜戶、猶ほ犬を聞き、春濤、魚を上らむと欲す。
期君布新政。去卜海邊居。期す、君が新政を布き、去つて海邊の居を卜するを。

【字解】(一) 紺轡車、紺色の幕を垂れた車で、五品以下の乗用である。隋書儀禮志に「轡車は、三品以上、青轡朱裏。五品以下は紺轡碧裏、皆白銅裝」とある。(二) 井煙、むかしは、四社に共用の井があつた故に、市中の一區劃を井と稱し、市井・井邑などいふ熟語がある。市中の炊煙。

【題義】少府は、縣令の尊稱。陳某は、名字不詳。嘉定は、蘇州府に屬し、後に太倉州に隸した。この詩は、陳某が嘉定の縣令となつて赴任するを送つたのである。

【詩意】桑の若葉の茂れる路に雨が歇み、そこに縣民が大勢出かけて、紺轡を垂れた君の車を迎へるであらう。嘉定地方は、湖沼多き爲に、灌溉の便が善くて、田水は常に満ちて居るが、何分田舎であるから、城は小さくして、市中の炊煙も稀疎である。夜になると、門を守る犬の吠えるを聞くべく、江邊には、春の鰯が魚を打ち上げて来る。君は、著任の後、新政を布いて、務めて人民の爲めを計り、そして、居を海濱に卜して、心のどかに風景を賞したならば宜しからうと思ふ。

報恩寺逢蔣主簿就送還如阜

報恩寺、蔣主簿就に逢ひ、如阜に還るを送る

貪語酒寒頻新年見故人。語を貪つて、酒寒頻りなり、新年、故人を見る。

別時煙寺晚歸路雪江春。別時、煙寺の晚、歸路、雪江の春。

造次燈前面蒼茫船上身。造次、燈前の面、蒼茫、船上の身。

明朝楚花發莫歎縣廚貧。明朝、楚花發す、歎する莫れ縣廚の貧なるを。

【字解】(一) 貪語、談話を貪る。(二) 酒寒、酔ひ醒めの寒さ。(三) 造次、わづかの間、忽卒。(四) 蒼茫、あわただしさ、眼、杜甫の北征に蒼茫同三家室とある。(五) 楚花、楚地の花。(六) 縣廚、役宅の廩所。

【題義】姑蘇志に「報恩講寺は、城の北陲に在り、故に北寺と呼ぶ、即ち通玄寺の舊基。吳越の錢氏、支硎山報恩寺を移し、改めて此に建つ、浮圖十一級、兵燹後、行者金大圓、募つて九級を建つ」とある。主簿は、縣令の下役、姓は蔣、名は就。如阜は、一統志に「揚州に屬す、戰國の楚地」とある。この詩は、報恩寺に於て、如阜の主簿蔣就に逢ひ、歡晤の後、その歸任を送つたのである。

【詩意】話に實が入つて、折角飲んだ酒の氣もなくなり、酔ひ醒めの寒さが、頻りに來り襲ふが、何は兎もあれ、新年に際して、舊友に逢うた嬉しさ。別る時は、日暮、寺邊に煙たなびき、これより、君の歸り行く路は、江上の雪消えかかつて、追追春景色を催すであらう。何分、燈前で面會して、忽卒なりしは、遺憾であつて、舟で歸る君も、随分あわただしい。やがて、歸任の時は、楚地の花も咲き出づるであらうから、本來の貧縣で、食ふ物さへ碌に無いといつて、歎息するにも及ばぬことと思ふ。

贈姚東曹

姚東曹に贈る

爐氣拂春衣分曹直省闈。爐氣、春衣を拂ひ、分曹、省闈に直す。

相門旄節重郎舍簡書稀。相門、旄節重く、郎舍、簡書稀なり。

夜直聽鐘度晨朝策馬飛。夜直して、鐘を聴いて度り、晨に朝して、馬に策つて飛ぶ。
共憐王掾少粉署有光輝。ともに憐む、王掾の少きを、粉署、光輝あり。

【字解】【一】爐氣 香爐の匂ひ。【二】分曹 組を分ける。【三】省闈 請め所。【四】郎舍 郎中どもの溜まり所。【五】王掾 王珣を云ふ、晉書の本傳に「珣、謝玄と桓温の掾となり、ともに温に敬重せらる。かつて、人に謂つて曰く、謝掾は年四十にして旣仕を擲し、王掾は黒頭公となるべし」とある。【六】粉署 白色に塗られたる官衙、漢官儀に「省中、皆胡粉もて壁を塗る、故に粉署といふ」とある。

【題義】後漢書百官志に「太尉公屬東曹、二千石長吏を主とし、遷除して軍吏に及ぶ」とあつて、東曹といへば、太尉、即ち陸軍大臣の秘書官といつた様なものと見える。この詩は、その職に居た姚某に贈つたのである。

【詩意】香爐の匂ひに春衣を拂はせ、組を分つて、省中の詰所に出仕する。その長官は、即ち太尉で、さすがに相門の旣節仰仰しく、格式も貴いが、秘書どもの居るところは、文書の往復も稀であつて、随分ひまである。そこで、夜、宿直する時には、鐘を聞いて出掛け、早晨に參朝する折は、馬に鞭つて飛ぶが如く行く。君は、年少にして、才氣煥發、さながら、古しへの王珣の如く、その將來に囑望せられ、粉署も爲に光輝を生ずるばかり、マア折角自重して、しつかり、遣つて貰ひたいものである。

【餘論】この詩中、直の字の重複して居るのは、一寸目障りである。

鍾山雪霽圖

鍾山雪霽るの圖

山勢識龍蟠香臺擁翠巒。山勢、龍蟠を識り、香臺、翠巒を擁す。
草堂猿嘯晚蕙帳鶴驚寒。草堂、猿、晩に嘯き、蕙帳、鶴、寒に驚く。
雲擁梁僧塔苔封宋帝壇。雲は擁す梁僧の塔、苔は封す宋帝の壇。
昔年游歴處今向畫中看。昔年游歴の處、今、畫中に向つて看る。

【字解】【一】龍蟠 諸葛亮が、石頭虎踞、鍾山龍蟠といつたことがあるので、前に卷十一、登雨花臺の詩中にも注して置いた。【二】香臺 寺刹を云ふ。張說の詩に香臺豈是世中情とある。【三】蕙帳 蕙は蘭の一種、一莖一花なるもの、蘭の香を焚きしめたる帳、隱者の居るところを指す、孔稚圭の北山移文、蕙帳空兮夜鶴想に本づく。【四】梁僧塔 梁僧は寶誌で、その墓がある。前に卷九、游鍾山の詩の梁僧遺墓臥殘碣の句下に注して置いた。【五】宋帝壇 宋の高祖の天を祀りし處、同じ詩の宋帝廢壇埋深菅の句下に注して置いた。【六】昔年游歴處 青邱は、南京に居た時、後に鍾山里第に寓し、そこは、山の麓であるから、日夕、游渉したことを思はれる。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】鍾山は、龍の蟠るが如しといはれて居つて、この畫でも、さういふ山勢が明かに識別せら

れ、そして、多くの寺どもは、翠巒を擁して、處處に點綴して居る。山中には、隠者も大分住んで居るが、雪後の事であるから、草堂に近く、日暮、猿が鳴くであらうし、又蕙帳人なき處に於て、鶴は、その寒げなるに驚くことであらう。梁僧寶誌の墓は、雲が繞つて居るし、宋の高祖の天壇は、苔が封じて居る。この山は、前年、毎に遊歴した處であるが、今、畫中に之を見ると、流石に感慨に堪へられぬ。

【餘論】前聯は、全く孔稚圭の北山移文に本づいたものであるが、その痕跡なくして、新意を發したのは、取りも直さず、熟事生用の妙である。第二、第五の兩句に、擁の字の重出して居るのは、粗漏であつて、こんな處は、どうにでも成ることと思ふ。なほ、この詩は、鍾山雪霽といふ題であるのに、前聯だけが、解釋によつては、聊か雪に關係ある様に見ゆる外、すこしも、題意を發揮して居らぬは、如何したものか、まことに怪訝に堪へぬ。

周興裔墓

周興裔の墓

高宗南渡後、觀察死、封疆。

高宗南渡の後、觀察、封疆に死す。

畫策無遺算、禽胡不避強。

畫策、遺算なく、胡を禽にせむとして、強き避けず。

數窮身遇害、名重骨猶香。

數窮して、身、害に遇ひ、名重くして、骨猶ほ香し。

賜葬虞山勝、恩褒萬古揚。

葬を賜ふ虞山の勝、恩褒、萬古に揚がる。

【字解】(一)觀察、即ち周興裔を指す。(二)封疆、領内。(三)數窮、數は運命。(四)恩褒、死後の旌賞。

【題義】題下の原注に「虞山の東に在り、宋の高宗、公の節に殉せしを憫み、轉字圩山の地十四畝を給して勅葬す」とある。元來、周興裔は如何なる人か、史傳に見えぬから、よく分からぬが、この詩で見ると、金人を禦いで戦死したものらしく、青邱が特に之を追弔したのも、もとより、當然の事である。

【詩意】宋の高宗が、南、江を渡つて臨安に偏安せし後、觀察は、その領内を固守して、遂に戦死して仕舞つた。もとより、その畫策には遺漏なく、胡人を擒にせむとして、その強きを避けず、天晴、智勇兼備の大人物であつたのに、運命の盡くるところ、身、害に遭ひ、名は千載に重くして、骨、猶ほ香ばしきを感じる。さればこそ、虞山の勝地に勅葬せられ、死後の追褒は、萬古に傳はつて居る。

【餘論】後聯十字は、觀察の像贊に當つべく、まことに簡にして盡くして居る。

終